

## 報 告

# 「敬老の日」の社説から読みとく高齢者の特徴 —平成30年間の分析から—

Features of elderly people to read from editorial on "Senior Citizen's Day"

- From analysis of Heisei 30 years -

阿部智恵子\*<sup>1</sup>, 阿部 芳江\*<sup>2</sup>, 谷口 泰司\*<sup>3</sup>

**要約:** わが国では、高齢化が進行している。平成30年においても、高齢者をめぐる環境や高齢者に対するイメージは大きく変わってきた。高齢者の置かれている現状は、社会環境とともに変化を続けている。少子高齢化による人口減少、核家族化の進行、平均寿命の延伸、インターネットの普及などである。これらの変化は高齢者にも大きな影響を及ぼしていると考えられる。

新聞は、TVと並んで同じくマスメディアの2大勢力をなしている。新聞の「社説」は、世論をもとにした新聞社の「かお」であり、同時に新聞社の論説であり、その時代の社会や価値観が色濃く反映されていると考えられる。一般住民は、マスメディアを通して情報を得て、生活の基盤としており、特に新聞の「社説」は、時代の変化とともにあり世論と密接な関係があると思われる。

祝日法は、「敬老の日」の趣旨を「多年にわたり、社会につくしてきた老人を敬愛し、長寿を祝う」としている。「敬老の日」の社説には、高齢者の現状や課題、展望などの記事が掲載されることが多い。

本研究では、平成30年間の「敬老の日」の社説を素材としてその時代の高齢者の特徴を明らかにした。その結果、平成元年～10年では、6つのカテゴリ「敬老」、「介護」、「住宅」、「ビジネス」、「政治」、「孤独」が、平成11年～20年では、7つのカテゴリ「誇りと権利」、「住居」、「認知症」、「介護」、「独居の男性」、「高齢者の定義」、「チャレンジ」が、平成21年～30年までは、5つのカテゴリ「支え合い」、「超高齢化社会」、「不明高齢者」、「活躍の場」、「地域とのつながり」が、抽出された。

平成30年間を通して、「敬老の日」の社説は高齢者に関する多くの情報を発信しており、年代により内容の変化が見られた。その背景には高齢者人口の増加、2000年の介護保険の施行、価値観の変化などが背景にあると考えられる。

**Key Words:** 社説, 高齢者, 「敬老の日」

### I. はじめに

わが国では、平成31年5月から新しい年号となる予定で、平成の時代が終わろうとしている。平成の時代において、高齢者を取り巻く環境や高齢者に対するイメージも大きく変わってきた。高齢化の状況は、平成に入る以前から進んでおり、平成2年の国勢調査によれば、65歳以上の人口比率はすでに12.1%であったが、その25年後の平成27年には26.6%となり、他国に例のないほど高齢化の進行が早かった<sup>1)</sup>ことが報告されている。

高齢者の置かれている現状は、社会環境とともに変化を続けている。渡辺<sup>2)</sup>は、平成30年間は激動の時代であり、少子高齢化による人口減少、核家族化の進行、平均寿命の延伸、インターネットやスマートフォンの普及など、社会環境が大きく変化してきた時代だと述べている。そして、それらの変化は、高齢者にも大きな影響を及ぼしていると考えられる。

新聞は、TVと並んで同じくマスメディアの2大勢力をなしている。新聞の「社説」は、世論をもとにした新聞社の「かお」であり、同時に新聞社の論説であり、その時代の社会や価値観が色濃く反映されていると考えられる。その時代の新聞社の現状認識、課題及び展望に関する現れである。

斎藤<sup>3)</sup>は、「新聞は、世論を反映して成り立ち、社説はその世論をさらに打ち返して、国民相互の間に世論形

2018年12月4日受付／2019年1月24日受理

\*<sup>1</sup> Chieko ABE  
石川県立看護大学

\*<sup>2</sup> Yoshie ABE  
関西福祉大学 看護学部

\*<sup>3</sup> Taizi TANIGUCHI  
関西福祉大学 社会福祉学部

成の交互作用を営む。新聞において社説の占める地位は極めて重要なものといわざるをえない。」と述べている。そのため、「社説」は、その時代のわが国の高齢者の特徴を考える上で、手掛かりになりうるものと考えることができる。

祝日法は、「敬老の日」の趣旨を「多年にわたり、社会につくしてきた老人を敬愛し、長寿を祝う」としている。敬老の日に関しては、渡辺<sup>4)</sup>は、1950（昭和25）年、兵庫県が独自に9月15日を「年寄の日」と定めたこと、そして、1963（昭和38）年、老人福祉法制定に伴い「老人の日」になり、1966（昭和41）年に「敬老の日」として国民の祝日に加えられたこと等を説明している。

「敬老の日」の社説には、高齢者に関することが書かれている場合が多い。そのため、「敬老の日」の社説から、その時代の高齢者の特徴を読み解くことができると考える。

本稿は、「敬老の日」の社説から、平成30年間の高齢者の特徴を明らかにすることを研究目的とする。

## II. 研究方法

### 1. 対象

全国紙である朝日新聞社（以後、A社）、読売新聞社（以後、B社）の平成30年間の社説を研究対象とした。なお、社説は「敬老の日」のものとし、その中で、高齢者に関するものを研究対象とした。高齢者に関する社説以外は研究対象から除外した。A社、B社ともに全国紙で、販売数1、2を競う新聞であり、革新、保守という論調の違いがあるため、対象とした。また、30年間を対象にしたのは、平成31年5月からは、新しい年号となる予定で、終わろうとしている平成30年間を対象とすることに意義があると考えたためである。

### 2. データの収集方法

全国紙A社、B社の該当年月日の新聞縮刷版の「敬老の日」の社説を複写した。2018年のみ当日の新聞を複写した。

### 3. データの分析方法

「敬老の日」の社説を熟読したうえで、高齢者に関する記述を抽出した。また、類似した記述をカテゴリに分類し、区分ごとに高齢者の特徴を考察した。なお、区分は、①第1期区分：平成元年～平成10年（1989年～1998年）、②第2期区分：平成11年～20年（1999年～2008年）、③第3期区分（2009年～2018年）とした。

## III. 結果

表1には、平成30年間における「敬老の日」の社説で、「高齢者」について記載のあった新聞社2社の件数を示している。「高齢者」について記載があったのは、A社18件、B社22件の合計40件であった。

表1 平成30年間の「高齢者」のキーワードを含む敬老の日の社説の本数

区分	A社	B社	計
第1期区分：平成元年～10年 （1989年～1998年）	10	10	20
第2期区分：平成11年～20年 （1999年～2008年）	7	7	14
第3期区分：平成21年～30年 （2009年～2018年）	1	5	6
計	18	22	40

表2には、「敬老の日」における新聞社2社の「高齢者」に関する社説のタイトルを示している。

高齢者について記載されていない社説はA社12件、B社8件であり、A社の方が多かった。A社の記載のない年度は、2001（平成13）年、2004（平成16）年、2008（平成20）年、2009（平成21）年、2011（平成23）年～2018（平成30）年であり、2011年以降は8年間継続して記載されていなかった。B社の記載のない年度は、2001（平成13）年、2002（平成14）年、2004（平成16）年、2012（平成24）年、2014（平成26）年、2016（平成28）年～2018（平成30）年であり、2016（平成28）年以降3年間継続して記載されていなかった。

「高齢者」について記載のあった社説に関して分析し、カテゴリは〈 〉、記述は〈 〉で示す。以下、新聞社と年度は（A or B社：平成年）のように示す。

第1期区分のカテゴリは、〈敬老〉、〈介護〉、〈住宅〉、〈ビジネス〉、〈政治〉、〈孤独〉、の6つのカテゴリに分類できた。

〈敬老〉では、

- 〈政党の精神は具体的な政策で示してほしい（A：1）〉
- 〈日本の役所は「高齢者の生きがい対策」づくりに、余念がない。しかし、多くの高齢者は「年寄扱い」や「お仕着せメニュー」を嫌っている（A：3）〉
- 〈近年は高齢者や障害者を普通の人間として扱う「ノーマライゼーション」の考え方が主流になり、残った機能を生かして自立させることに重点が置かれている。

表2 「敬老の日」における新聞社2社の「高齢者」に関する社説のタイトル

	各 年	A 社	B 社
平成 元年 ～ 平成 10年	1989 (H1)	A1：敬老精神は具体的な政策で	B1：老人をベッドから解放しよう
	1990 (H2)	A2：老後こそ美しく	B2：サラリーマンの老後と孤独
	1991 (H3)	A3：敬老の実現は発想の転換から	B3：老いた親思う心を支援しよう
	1992 (H4)	A4：地方のお年寄りに敬老政策を	B4：高齢者の介護は地域の責任で
	1993 (H5)	A5：「真の敬老」を競う時代	B5：高齢者の個性を認め合う社会
	1994 (H6)	A6：市町村から敬老政策が変わる	B6：老いを解明する研究の推進を
	1995 (H7)	A7：あなたのまちの敬老政策は	B7：高齢者の自立に安全な住宅を
	1996 (H8)	A8：敬老が求めるビジネスと政治	B8：定年、それからどう生きるか
	1997 (H9)	A9：敬老は、さりげなく、いつも	B9：介護の基盤づくりを急ごう
	1998 (H10)	A10：五原則で点検しよう	B10：明るい高齢社会にするために
平成 11年 ～ 平成 20年	1999 (H11)	A11：「共用品」思想の定着を	B11：お年寄りにもさまざまな「顔」がある
	2000 (H12)	A12：誇りと権利を尊びたい	B12：もう一度、チャレンジしたい「敬老の日」に
	2001 (H13)	A13：記載なし	B13：記載なし
	2002 (H14)	A14：家のちから、生きる場	B14：記載なし
	2003 (H15)	A15：悲劇を防ぐ法がほしい	B15：「余生」でなく「第二の現役期」に
	2004 (H16)	A16：記載なし	B16：記載なし
	2005 (H17)	A17：まちが見守る認知症	B17：「高齢者」の定義を改めよう
	2006 (H18)	A18：引き算の介護もいいね	B18：幸福な長寿社会にしたい
	2007 (H19)	A19：独居の男性が心配だ	B19：社会保障の安定が老後の安心に
	2008 (H20)	A20：記載なし	B20：総裁候補は負担を率直に説け
平成 21年 ～ 平成 30年	2009 (H21)	A21：記載なし	B21：安心できる超高齢化社会に
	2010 (H22)	A22：支え合いの再構築を	B22：不明高齢者のいない社会に
	2011 (H23)	A23：記載なし	B23：住民が見守り合う地域社会に
	2012 (H24)	A24：記載なし	B24：記載なし
	2013 (H25)	A25：記載なし	B25：高齢世代の支え合いが大切だ
	2014 (H26)	A26：記載なし	B26：記載なし
	2015 (H27)	A27：記載なし	B27：高齢者の活躍の場を増やそう
	2016 (H28)	A28：記載なし	B28：記載なし
	2017 (H29)	A29：記載なし	B29：記載なし
	2018 (H30)	A30：記載なし	B30：記載なし

(B: 1) )

〈「痴呆性老人」を縛ったり、閉じ込めたりする時代が  
終わりつつある (A: 4) 〉

〈老人福祉計画は、そこに住む人が身の回りのことがで  
きなくなった時に市町村が提供する保健福祉サービ  
スの約束である (A: 5) 〉などの記述が抽出された。

〈介護〉では、

〈日本には、古代から地域の高齢者は地域で世話をし  
てきた伝統がある。(B: 4) 〉

〈住み慣れた場所で高齢者が最後まで暮らせるよう、今  
は介護基盤の全体的な底上げを図る時期だ (B: 9) 〉  
などの記述が抽出された。

〈住宅〉では、

〈高齢者が住み慣れた家で自立して暮らすには、危険な  
障壁を取り除く「バリアフリー化」が必要だ (B: 7) 〉  
などの記述が抽出された。

〈ビジネス〉では、

〈この分野の商品やサービスは、「市場原理」にまかせ  
るととんでもないことが起こるとい特徴がある。  
(A: 8) 〉などの記述が抽出された。

〈政治〉では、

〈真の敬老精神から遠い現実が支配的なこの国で、国際  
的に通用するような政策に挑む市町村も現れ始めてい  
る (A: 6) 〉

〈「敬老」か、「軽老」か。自治体の姿勢を見分ける第  
一のカギは、ホームヘルパーの数と仕事ぶりだ (A:  
7) 〉などの記述が抽出された。

〈孤独〉では、

〈サラリーマンは、肩書社会だ。敬老の付き合いは、そ  
れを外すことから始まる (B: 2) 〉などの記述が抽  
出された。

第 2 期区分のカテゴリは、〈誇りと権利〉、〈住居〉、  
〈認知症〉、〈介護〉、〈独居の男性〉、〈高齢者の定  
義〉、〈チャレンジ〉の、7 つのカテゴリにまとめら  
れた。

〈誇りと権利〉では、

〈施設に入るには家具や身の回りのものだけではなく、  
人間の誇りも置いていかなければならない (A:  
12) 〉などの記述が抽出された。

〈住居〉では、

〈年を重ね、自立が難しくなった時、たいていの人は、  
自宅で介護を受けるか、施設に入るか、の選択をせま  
られる (A: 14) 〉などの記述が抽出された。

〈認知症〉では、

〈体が不自由になっても、認知症になっても、安心して  
暮らせる地域づくりは、市民にとって切実な課題であ  
る (A: 17) 〉などの記述が抽出された。

〈介護〉では、

〈あれもこれも、とお世話を重ねる足し算の介護よりも、  
残っている力や意欲を生かす引き算の介護に目を向け  
たい (A, 18) 〉などの記述が抽出された。

〈独居の男性〉では、

〈地域で孤立しがちなのが、一人暮らしの男性の高齢者  
だ (A: 19) 〉などの記述が抽出された。

〈高齢者の定義〉では、

〈東京都老人総合研究所によると、「科学的にみても高  
齢者は、昔に比べて十歳若返っている。(B: 12) 〉  
〈内閣府が 60 歳以上の人に「高齢者とは何歳以上か」  
と聞いた調査では、8 割近い人が 70 歳より上の年齢  
を挙げた。93 歳で活躍中の日野原重明・聖路加国際  
病院理事長は、「高齢者の基準を 75 歳に引きあげては  
どうか」と提案している。(B: 17) 〉などの記述が  
抽出された。

〈チャレンジ〉では、

〈東京都老人総合研究所の調査研究によれば、この十年  
間で、高齢者の生活機能（日常生活能力、知的能力、  
社会的能力を総合したもの）は、大幅に向上した。(B:  
12) 〉

〈これだけ元気な高齢者が多くいるわが国で、その活躍  
の場が少ないのはどうしたことだろう (B: 12) 〉

〈日本の高齢者の勤労意欲は、諸外国に比べてすこぶ  
る盛だ。しかし、企業の九割は一律定年制を採用し、  
能力や意欲とは無関係に、高齢社員を退職させている。

こうした“年齢の壁”を見直したい。(B:12) などの記述が抽出された。

第3期区分のカテゴリは、《支え合い》、《超高齢化社会》、《不明高齢者》、《活躍の場》、《地域とのつながり》の、5つのカテゴリにまとめられた。

《支え合い》では、  
〈「支えた人が、後で支えられる」関係を社会全体でつ  
くれてこそ、「敬老の心」は再生産され、社会全体の  
活力も維持されるのではないか。(A:22)〉などの  
記述が抽出された。

《超高齢化社会》では、  
〈新政権は、老後の生活を支える年金、医療、介護をど  
う再構築し、維持していくのか。山積みする課題に取り  
組まねばならない。(B:21)〉などの記述が抽出  
された。

《不明高齢者》では、  
〈米紙ニュースウィークは、日本を「年を取るのに一番  
良い国」とたたえた。だが、「高齢者の所在不明が、  
数多く発覚し、その看板は大きく傾いた(A:22)〉〈各  
地で続々と明らかになった安否不明高齢者の問題は、  
「長寿社会」の寒々しい実態を浮き彫りにした。(B:  
22)〉などの記述が抽出された。

《活躍の場》では、  
〈高齢者の活躍の場を広げることは、孤立防止や介護予  
防にも有効だろう(B:27)〉などの記述が抽出された。

《地域とのつながり》では、  
〈(東日本大震災)被災地では、住民同士が程よく見守  
り合う、「長屋づきあい」をイメージした住宅提供の  
試みが動き出している(B:23)〉などの記述が抽出  
された。

#### IV. 考察

##### 1. 第1期区分:平成元年～10年(1989年～1998年)

《敬老》では、「敬老」という言葉が多用されていた。政党に対しての具体的な政策をと注文をつける内容も見られ、きちんとした具体的な施策が示されていないことが見て取れる。痴呆性老人や老人福祉計画についても言

及され、幅広く考えていこうという、昭和から平成の時代への引継ぎの時期であるともいえるだろう。

《介護》では、介護保険の導入前の時期であり、介護の摸索期であるといえる。今までの日本の伝統を大切にしつつ、介護の基盤を充実させるという、両方を見据えた記事内容であり、読者に対して、介護について情報提供と新たな介護へと目を向けさせる内容になっている。

《住宅》では、自宅で自立して暮らしたいと思う高齢者の増加により、昔に比べて、現在の住宅の条件と「バリアフリー化」に焦点を向けた記事内容になっている。

《ビジネス》では、高齢者の介護にも、ビジネスの入る余地が多くなっているが、一般住民が、目を光らせていないととんでもないことになるという警鐘を鳴らしている。

《政治》では、自治体の姿勢や政策に言及した記事も多く、市町村による格差も広がっていくという状況が見て取れる。

《孤独》では、サラリーマンを取り上げ、肩書社会からの変換を促すような内容である。退職前から地域社会との連携を持っていることが重要であると述べ、簡単な挨拶からということで、気軽にできることから勧めている。地域社会とのつながりの大切さを強調している。

##### 2. 第2期区分:平成11年～20年(1999年～2008年)

《誇りと権利》では、人間の誇りについて述べており、この時期で十分、誇りを持てるような対策がされていないということが読み取れる。

《住居》では、自立との関連から述べており、自宅か施設という狭い選択肢ではなく、新しい「家」としての「リベラ荘」を紹介し、そこで過ごす高齢者のいきいきした姿も紹介している。このような選択の方法もあることを一般住民に知らせていることに注目したい。

《認知症》では、安心して暮らせる地域について言及している。認知症の人が安心して暮らせる地域は、一般住民にとってもよい環境ということを強調している。

《介護》では、現在、当たり前に行われている足し算の介護、に対して、引き算の介護というものを提案している。発想の転換を勧めていることが読み取れる。

《独居の男性》では、平成直前の昭和 63 年の社説で、「元氣出そうよ、男性シルバー」という記事があり、今回、「男性」についての記事は、2 回目であるが、前回の時よりも社会状況は変化し、問題も深刻化してきていることが読み取れる。独居の男性を対象とした個別の分野にも踏み込んだ内容となっている。

《高齢者の定義》では、東京都総合研究所の見解や日野原氏の案をもとに、定義の変更を進めている内容である。世論における高齢者のイメージ像が、昔に比べて、高齢者の能力ややる気に格段の差がみられることが背景にあるのだらうと考えられる。

《チャレンジ》では、能力、やる気があっても一律定年という、大きな壁が立ちはだかっている状況があり、能力、やる気を活用するのと、高齢者が活躍できるような社会を目指すことが、本人にとっても家族にとっても地域社会にとっても重要ということを強調している。社会への提言とも捉えることができる。

### 3. 第 3 期区分:平成 21 年～30 年(2009 年-2018 年)

《支え合い》では、敬老と社会の活力との関係が読み取れる内容になっている。支えられたり、支えたりという循環する社会の必要性が背景にあるのだと考えられる。

《超高齢化社会》では、新しい時期を迎え、新政権に対する期待と不安は混在している記事内容である。高齢化社会と政治とは切り離せられないものがある。

《不明高齢者》では、多くの高齢者の所在が分からず、不明になっていること、それが、長期間、放置されていることから、高齢者に対する関心が薄れている社会の状況を知らせている内容となっていることに注目したい。

《活躍の場》では、逆説的に言うと、孤立や介護が必要になる背景には、高齢者の活躍の場や居場所がないということが、すべてつながっているのではないかと、地域

も巻き込み、高齢者の活躍への対応策を練っていく必要があるといえよう。

《地域とのつながり》では、この時期に東日本大震災があり、被災者に目が向けられ、住民同士が程よく見守りあうという、窮屈ではない関係の大切さについて言及されており、さらに今後地震が頻発したとしても対応できるような施策が必要になってくるのではないかと考える。

今回、第 1 期区分から第 3 期区分までを分析することによって、区分によって異なるカテゴリや、同じカテゴリでも記述の違いがあることがわかった。時代背景に応じて高齢者の置かれる状況は変化するため、その時代の高齢者の特徴に合わせた制度や支援が重要であると考えられる。

渡辺<sup>4)</sup>は、「敬老の日」の社説の変遷に関する報告の中で、「敬老の日」制定の 1966 年、1987 年、1995～1997 年の社説に関して分析し報告しているが、やはり時代背景に応じた高齢者の状況が報告されていた。年代が進むにつれて、多様化と同時に、個別分野に踏み込んだ論が増えたと分析している。

また、表 2 より、「敬老の日」の高齢者に関する社説が近年徐々に減少していることが分かる。

A 社、B 社ともに、高齢者の記事が、掲載されていない年の「社説」は、「経済」、「政治」、「国際社会」、「紛争・テロ」という記事が大半を占めていた。その他には、その時代を反映した「パラリンピック」、「ふるさと納税」、「ips 細胞移植」などがみられた。このように、「高齢者」の記事に優先して掲載しなければならない記事が増えたことも一因と考えられる。

## V. まとめ

高齢者に関する「敬老の日」の社説は、高齢者に関しての多くの情報を発信していた。30 年間の「敬老の日」の社説を比較すると、内容に変化が見られた。その背景としては、平成 30 年間において、高齢者の人口の増加や 2000 年の介護保険施行、地域包括支援などの社会状況の変化、人々の価値観が変化してきていることが考えられた。

新聞は、TV と同じく、国民への情報提供の場であり、提言の場である。記事の中でも、特に「社説」は、新聞社の「かお」であり、その時代の世論が強く反映されて

いるものであるといえる。

「敬老の日」の社説を分析することにより、その時代の高齢者の置かれている状況や課題、新しい高齢者像、社会の変化も浮き彫りとなった。今後も高齢者の増加は予測されており、マスメディアが取り上げる高齢者像も多様化していくことと考えられる。看護職がマスメディアから発信される「高齢者」像に意識を向けること、「社説」から、高齢者の置かれている現状や課題、提言等を把握することは、高齢者を理解する上での一助になり得ると考えられる。

#### IV. 文献

- 1) 内閣府 (2016) : 高齢社会白書平成 28 年版
- 2) 渡辺秀樹 (2018) : 激動の平成史, 1, 洋泉社, 東京都
- 3) 斎藤吉史 (1998) : 社説にみる世界と日本 (初版), 東洋書店, 東京都
- 4) 渡辺資二 (1997) : より身近に, より多彩に—「敬老の日」社説の変遷, 新聞研究